

## 令和2年度 学校長による自己評価・総合評価

### 【総合評価】

本年度は、新型コロナウイルス感染の影響で、3月からの休業、4月からの分散登校、5月からの全員登校、行事の中止や延期、運動会と文化祭を合わせた梨の木祭等、未知なる状況下のなか、様々な課題を職員の工夫や団結で乗り越え、本日まで参ることができました。梨の木祭の後には、皆様から児童生徒の発露する姿を認めていただき感想を大勢よりいただくことができ、励みとなりました。ギガスクール構想に基づく一人一端末の導入、第三者評価の試行、放課後子どもチャレンジ教室の開講等も新たな歩みとなりました。また、本年度後半には、県内外の大学関係研究者や県内自治体の教育委員会、学校関係者の訪問、その他市町村の行政視察を受け入れました。多くが「義務教育学校としての成果と課題」「コミュニティ・スクールとしての成果」等の課題もつての訪問でした。視察された中で多くの方々は、子どもたちの追究・探究の姿、核心に迫る対話活動、生徒が主体的に進める授業づくり等に驚かれます。その中で、地域と共に共育(教育)にあたる美麻の地での充実した教育環境で、児童生徒が主体となって授業を創ることが職員の喜びであり、地域の皆さんと共に子どもを育てていくことが本校の強みであると伝えています。

さらに、これからの社会を見据え、その社会を生き、未来を創る子どもたちへの教育の在り方を求め続け、学び続けていけたらと思います。

### 《自己評価から見える課題と方向》

- 1 教育課題を「協働の学びの質を高める」とし、全教職員で取り組んで来た成果として、授業に対する児童生徒の肯定的な評価が、昨年度を上回る高い状況を維持している。対話を軸とする協働の学びが浸透し、児童生徒の生の言葉からも「対話」がつつやかかれ、日常化してきている。ジャンプ期の生徒の評価が高く、9年間後半での熟成が図られてきている。一方、協働の学びの中で指導の個別化や学習の個性化を進めていく必要がある。
- 2 将来の夢や希望をもち、あるいは目指したい職業を描く児童生徒がジャンプ期で6パーセント増加していることは、キャリア・パスポートの運用や夢の時間・市民科を含めてのキャリア教育の成果であると思われる。今後も授業や生活における自己有用感を高め、認知能力との相乗効果を図りたい。
- 3 元気アップ運動について、児童生徒・保護者の肯定的なとらえが昨年度を大きく上回った。体力づくり・健康づくりの意識をさらに高めていきたい。運動の楽しさを味わいながら、自ら主体的に取り組む元気アップ運動を進めていきたい。
- 4 自治会活動や歌声づくりでは、昨年度から継続して「ミニミニグループ」を編成し、活動のなかで関係づくりが深まった。肯定的な評価が、どのブロックでも昨年度以上に高まっている。自治会担当や音楽科が丁寧な指導を行ってきた成果である。さらに、個に応じた支援を丁寧に続けていきたい。



## 《具体的な取組への展望》

- 1 協働の学びの質をさらに高めるために、魅力的な学習問題の設定、目的意識をもった対話、児童生徒が主体的に進める授業づくりを進める。カリキュラム研修の中心講師は、文教大の藤森裕治教授に、第三者評価者を麻布研究所長の村瀬公胤先生に引き続き依頼する。個々の教員が自分ごととして進めていく課題研修は、ミッション探索カードを活用し、副校長との個別面談を展開しながら、個々に指導者を招聘し、研修推進に厚みを持たせる。
- 2 児童生徒が、自己有用感を培えるように、授業において友の役に立てたという対話の充実や大町ドリーム(キャリア・パスポート)の活用を進めていく。キャリア発達を促せるよう、社会科学見学や職業体験、市民科での記録をポートフォリオとしてファイルに残していく。また、夢や希望、将来への期待がもてる児童生徒の育ち、自己有用感を培う児童生徒を期待し、市民科や夢の時間を始め、全教育活動でキャリア教育を進める。
- 3 学びに向かう力を育むために教職員のカリキュラム・マネジメントや授業づくり、これから必要とされる教師スキルの向上にかかわる研修を継続し推進する。
  - ・思考ツールの活用方法
  - ・市民科や夢の時間等の探究的な学びを支える教師の関わり
  - ・OPPシートやマインドマップ活用方法
  - ・個々の特性を大切にし、可能性を伸ばす児童生徒理解
  - ・新学習指導要領内容の理解と授業づくり準備 等
- 4 メタ認知により、自分の体づくりでのよさや課題を明らかにし、個人の体力向上方略を決め出したり、特徴に応じた元気アップ運動の内容を設定して取り組んだりすることで、自分の身体への関心を高め、運動の喜びと体力の向上を児童生徒が感じられるようにする。すこやかカードの効果的な活用と合わせ、自己の身体に関心をもち、主体的に健康の保持増進や豊かなスポーツライフを実現しようとする素地をつくる。
- 5 歌声づくりによる集団づくりのこれまでの成果を踏まえ、対話を基盤とした集会の推進やさらなる児童生徒主体の歌声づくりの充実を図る。成果が上がっている「ミニミニグループ」の活動を通し、集団づくりにおける各期のつながりをさらに深め、よりよいリーダーとフォロワーとしての関係づくりを図る。「あこがれ」と「やさしさ」の互惠性を大切にし、なかよし班活動に対話的活動を盛り込などの工夫と内容の充実により、個々あるいは異学年間の理解を深めていく。
- 6 一人一端末を活用する。協働の学びの一ツールとして、活用研究を進めると共に、多様な児童生徒一人ひとりに生きて働くアプリの活用を図り、指導の個別化や学習の個性化を進める。
- 7 危機管理を含め、学校づくりにおける諸課題を共有できる開かれた学校とするため、学校運営協議会、地域づくり会議、公民館、PTA等とさらなる連携・協働を深める。

大町市立美麻小中学校  
校長 山岸 澄雄